

## 「仕上げること」

### ハイデガーにおける行為の本質

平山浩章

ハイデガーは、彼の一九四七年の著作である『ヒューマニズムについて』の冒頭で、行為の本質について述べています。そこでは、行為の本質とは、「仕上げること」であると述べられています。更に、「仕上げる」とは、「あるものを、そのものの本質の充実の内へ展開し、その充実の内へ導き出し、現わにすることを、つまり前へ導き出すことである」と述べています。それでは、ここで言われている、あるものをその本質の充実さへと展開し、導き出すとは、より具体的にはどのような事柄を言っているのでしょうか。ここでは、ハイデガーが行為の本質としているこの「仕上げること」が、一体どのような事柄を指しているのか、それについて考えてみたいと思います。

そこでまずこのことを考察する手がかりの一つとして、芸術作品をつくるということを取り上げてみたいと思います。それは言うまでもなく、芸術作品をつくるという行為が、我々人間の行為の中でもきわめて人間的なものと言えるでありましょうし、また、芸術作品であれば、一つの仕上げられたものとして、この「仕上げる」という行為の本質をより捉えやすくするのはないかと考えるからです。そのさい、我々の考察の導きとしては、ハイデガーのもう一つ別の著作、すなわち、彼が一九三五年から三六年にかけて行なった講演をもとに書かれた、『芸術作品の起源』という著作をとりあげてみることはできないかと思えます。

『芸術作品の起源』という著作は、いわゆる芸術史といった類の意味での芸術の起源が探求されて

いるわけでもなく、また、作品をつくる芸術家の立場のみに定位して書かれているのでもありません。そういった点からすれば、作品を創造する芸術家についての言及は数少ないのですが、この著作におけるハイデガーの方法が、作品そのものから芸術作品の本質を説明しようとするものであり、それに関わるかぎりでの芸術家のあり方も説明されるといったものである以上、我々もまたこの著作の展開の順序に従って、この著作の内容を追っていきながら、芸術家の作品創造というものが、「仕上げる」ということについて、どのようなあり方をするものなのかを探ってみたいと思います。

この著作は、導入に当たる部分と、それに続く三つの章から主に成り立っています。導入の部分では、ハイデガーは、この著作の意図として、芸術作品の起源と言った場合の起源とは、本質の由来であると述べ、芸術作品の起源についての問いは、芸術作品の本質についての問いであると述べています。更に、芸術作品が芸術家によってつくられ、また、芸術家は芸術作品によって、正に芸術家となるという関係から、この関係の内にある芸術そのものの本質もまた問われることになるかと述べています。

次に芸術作品の本質を見出すために、ハイデガーは三つの主要な章の一つ、「物と作品」において、芸術作品のもつ一つの物としての性質から、我々の身のまわりの物、たとえば道具とか、ただの石や土などの物との比較において、物とは何か、更に、作品が単なる物と異なるとして、そこには物としての性質以上に何が潜んでいるのかを見出そうとしますが、伝統的な、物についての概念的解釈によるとらえ方を避けて、ハイデガーは、芸術作品の中にとらえられている物を例として挙げています。その作品とは、ゴッホの描いた一枚の百姓靴の絵です。百姓靴は一つの道具ですが、道具が単なる自然物でもなく、また、芸術作品でもなく、いわば単なる物と芸術作品の中間に位置するものであることから、ハイデガーは、まず道具のあり方から、物が物としてあることや、作品が作品であることを

さぐろうとしています。この絵に描かれているような実際の百姓靴は、役に立つことのうちに消えていきます。ハイデガーの言葉では、「靴は野良仕事をする百姓女が靴のことを考えたり、靴を眺めたり、あるいは、ただこれを感じたりすることが少なければ少ないほど、それだけ本当に靴である」ということになります。しかし、この絵の中に描かれている靴の場合はどうでしょうか。ハイデガーは、この絵の中の靴に、百姓女の労働の歩みや、根気、土のしめり、苦難の克服の喜びなどを見えています。そして更に、この靴が大地に帰属し、百姓女の世界の中で保存されていること、この靴が自足し、頼りになるものとして安らいでいる姿を見とっています。とすれば、現実に用いられている靴に対する我々の取扱いは違って、この作品の中には、道具としての靴のあり方の開かれた世界、あからさまな世界が作られていると言うこともできます。ハイデガーは、「あるものあからさまを、ギリシヤ人は、アレーテアと呼び、私たちはこれを真理と呼ぶ」と言っています。そして、芸術作品の中では、あるものの真理が、作品の中に据えられたのであると言っています。このことについてハイデガーは、更に、「芸術の本質は、あるものの真理が、自らを―作品の―中に―据えることかもしれない」と述べて、作品を、いわばその下部構造としての物からとらえようとする方法からではなく、作品を作品としてとらえ直そうとします。

「物と作品」に続く二つ目の章は、「作品と真理」という題が付されています。ここでは、まず、作品が作品としてあること、すなわち作品の自立ということが問題とされています。ここでは、芸術家についての興味深い記述があります。すなわち、作品の自立こそ芸術家の本当の狙いであり、作品は芸術家によって純粋な自立へと開放されなければならないということ。更に、作品の自立過程を芸術家について見るならば、それは作品に対して「無関心」であること、言わば、作品を生み出すために自分自身を創造のうちに滅却することであると書かれている点であります。ここでは、通常我々が

考えるような、芸術家の主観によって一つの偉大な作品が生み出されるという考えは打ち消されています。それでは、作品の自立とは何でしょうか。ハイデガーは、先のゴッホの絵とは違って、ここでは写像芸術には属さない、建築作品の例を挙げています。それはギリシャの神殿であるのですが、この神殿の中で神は包みかくされながらも、神聖な区域を押し広げ、周囲に統一をもたらすということ、すなわち、こうして開かれた一つの世界に人間は住み、それを支えているのは大地であるということ、すなわち、「一つの世界をたてることと大地をつくることは、作品が作品であることにおける二つの本質的な関係である」と、ハイデガーは言っています。しかし、この世界と大地は本質的に異なるものであり、作品が自立して安らぐ内には、この世界と大地の闘いがあると言っています。すなわち世界は開くものとしてあり、大地はかくまうものとしてあると。ここにおける「大地」という表現は、メタフォーリカルな表現で、ハイデガーも、「ここで大地という意味には、地球という一つの遊星の質量、堆積は含まれていない」と述べています。ハイデガーが、大地について、「人間が住むということをそのうえに、またその内に築きあげるもの」と述べているかぎりでは、我々は通常のいわゆる大地や自然の姿を想い浮べることができませんが、作品についてみれば、大地を、「作品がさしもどされてゆくところ、そしてさしもどされながら作品をのしあがらせるもの」と規定しています。また、大地が自分を隠すということは、簡単なさまや形態の充実さへとくりひろげられることであると言っていることから、作品についてみれば、作品素材がこの大地に相当すると思われれます。道具における素材であれば、それは道具として使われ、役に立つことのうちに消滅していきます。「素材は、道具であることのうちに無抵抗に消滅してゆけばゆくほど、それだけより良く、役に立つものである」のです。しかし、神殿の例についてみれば、神殿という作品は、一つの世界をたてることで、道具における素材とは異なって、素材を消滅させるようなことはせず、素材を作品の開かれた世界へ真先に現れ出さ

せ、素材を安らわせませぬ。神殿を支えている岩石は、砕け散る素材そのものとしては現れず、すなわち自らを隠しつとどしりした重さを我々に伝えます。

作品においては、こうした大地と世界との闘いの中で真理が出来事となるとハイデガーは言っております。それではこの真理とは何でしょうか。ハイデガーは、それは認識と対象の一致といったことではなく、事柄があらさまとして現れることだととらえています。これは先にも述べた、ギリシヤ人におけるアレーテアということでもあります。しかし、先の大地と世界との関係におけるように、開けることに対しては隠すことがつきまといまいます。ここで隠すということは、存在するものがそれとは違って現象することです。ハイデガーは、真理の本質として、この開けることと、隠すことの根本的な闘いを見ています。この対立のあいだに真理の本質があるとされるわけですが、このことについて、ハイデガーは「真理の本質は非真理である」とも表現しています。これは我々の常識をはるかに超えた表現のように思われますが、この言葉の意味としては、真理が本質的にあるために、開けるといふことに対して、隠すという由来を忘れないこと、迷わせることの厳しさを期待してのことだと言っています。こうした隠すことと開けることの闘いの中で、真理は出来事となるのであるが、しかしこれが出来事となるのは、ごく少数の場合であるとハイデガーは述べ、その一つが作品が作品としてある場合であると言っています。すなわち神殿が建つことによって真理が出来事となるとはあるものが正しく表現されたり、正しく表現されていることではなく、存在するものが全体が隠れないあからさまへもちこまれて、そこに保存されるということとです。ゴッホの絵の中で真理が出来事となるのは、目の前の靴が正しく描写写されていることではなくて、靴という道具が靴であることを明らかにして、あるもの全体、世界と大地との闘いが隠れもないあからさまになったということです。その中では一つ一つのものが何であるかを示すだけでなく、あるもの全体への関係において、あからさまをあから

さまとして出来事にするわけでありませぬ。

しかし、このように作品の中に真理が出来事となるとして、作品は何と言ってもつくられたものであるという点については、まだ十分に語られていません。作品と創造との関係についても見ていかなければなりません。しかし、創造ということについてみれば、我々の日常の道具もまたつくり出された物であります。そこで、道具が制作されることと区別して、作品が創造されるということはどういうことかをハイデガーは見ていこうとしますが、そのさい、先に作品の中に真理が出来事となると考えられたことから、言い換えれば、「物と作品」の章で投げかけられた言葉、「真理が、自らをー作品のー中にー据える」ということを、あらためて芸術の本質と規定した上で、今度は創造の本質も含めて、出来事となる真理について問うていきます。

『芸術作品の起源』における主要な三つの章の最後には、「真理と芸術」という題がつけられておられます。この章ではまず、作品が一つの創造されたものであるということから、芸術家の活動へ目が向けられます。ここでハイデガーは、創造するとはひき出すことであるとまず規定しています。しかし、道具の制作もひき出すことです。ギリシャ人は、芸術家も道具の職人もテクニースと呼びました。そして、芸術と手仕事は一つの言葉、テクネーと呼ばれていました。このテクネーという言葉については、ハイデガーは、テクネーとは本来、芸術や手仕事のことではなく、まして今日の技術的なものを指しているのではなく、知ること、見ること、本質的に知覚すること、すなわちギリシャ人のアレーテアに相当するものであること、従ってテクネーとは、ギリシャ人の経験した、知ることとしてあるものをひき出すことであると述べています。そしてハイデガーは、「芸術家がテクニースと呼ばれるのは、同時に手仕事の職人でもあるからではない。そうではなくて、作品をつくることも道具をつくることも、あのあからさまにするという出来事であるからだ。このひき出すということが

あらかじめ、有るものをその見えることからその本質的にあることへ連れ出してくるのである。いま述べたことはみな、自ずと成りいでて上へのびる有るもの、すなわちピュシスのどまん中でおこなわれる」とも述べています。しかし、芸術がテクネーと呼ばれることから芸術家の創造行為が手仕事から知られるわけではありません。作品の本質によって、創造することの本質も規定されるだろうとハイデガーは考えます。作品の本質が、真理が出来事となることにあるのなら、創造されることによつて出来事となる真理とはどのようなものなのでしょう。このさまを見るのに、先程述べた、真理が「自らを―作品の―中に―据える」という事態にたち返ってみたいと思います。この事態は、これを芸術家の側から見れば、創造の本質とされたひき出すこととからませて、芸術家とは真理をひき出すものであり、真理の側から見れば、自らが開かれた世界をつくり出し、ひき出されたものとなり、一つの作品となると言えましょう。創造とはひき出すことであるとハイデガーは規定しています。ただし、今述べましたように、真理、あるいはあからさまとの関係では、むしろ受けることであり、そこでは、作品として真理が「形態」へと定められます。そこには素材が用いられますが、手仕事と違う点は、作品は創造されるものへ自らも創造されてゆくという点です。ここにおける芸術家の存在、あるいは実存の本質は、主体の決定によって内から外へと出ていくことではなく、存在するものの開け、これは目の前にある状態ではなく、一つの出来事としてハイデガーはとらえているようですが、そこにおける隠すこととの分裂において、こらえて立ちとどまることにあると言えましょう。ハイデガーは、創造することのうちにも、自分のことを目的として努力する主体の仕事や活動が考えられているのではないということ述べております。しかし、これは芸術家におけるあり方ばかりではなく、作品に対する我々のあり方ともいえます。すなわち、作品にはそれを保存する（支える）人々も必要とされます。

ところで、作品が創造される前に、あるいは真理が出来事となるには、芸術家と作品の間に一つの関係が必要となります。このさまはどのようなものでしょうか。ハイデガーはデューラーの言葉を引用しています。そのデューラーの言葉とは、「というのは、芸術は自然の中に確かに隠れている。この芸術をひきだすことができるひとが芸術をもつ」というものです。ここでの「ひきだす」とは、線を引くという意味ですが、ハイデガーは、線をひきだすことが、予め基準ではないものとの闘争として開かれていなければ、線を引きだすことはできないであろうと述べています。このことについてはもう一つ別の例を挙げてみたいと思います。それはミケランジェロの『目覚める巨人』と言われている彫刻であります。ミケランジェロは、創造しようとしていたイメージが素材の中にすでに描かれているのを見る能力を信じていたようでありますが、大理石に浮き彫りにされたこの像の様子は、あたかも固い大理石の中で、巨人の像が息づまる思いで、開かれることを待っていたかのようにあります。

さて、『芸術作品の起源』というこの著作において、芸術の本質は、真理が、「自らをー作品のー中にー据える」ことであるとされました。また、この著作の「真理と芸術」という章の末尾で、ハイデガーは、「芸術は真理をとびだたせる」とも述べています。更に「本質の由来から打ち立てつとびだすこと (Sprung) において何かを存在へともたらすことが、起源 (Ursprung) という言葉の意味である」とも述べています。すなわち、この著作の題名である『芸術作品の起源』とは、芸術作品の由来は芸術であり、それは真理を跳びだたせる起源であると解せるかと思えます。

この著作においてふれられている芸術家の創造行為をふり返り、これを最初に申しました、『ヒューマンイズムについて』の中の言葉と結び合わせるならば、「仕上げる」とは、ひきだすことであり、そのようなさまで、真理を真理として十全なかたちで現わにすることと言えるではありません。ハイ

デガールは、このように真理を設けることを、すなわち芸術を広い意味ですべて詩作としてとらえています。詩作するもの、あるいは芸術家にかぎらず、思索するものもまた仕上げるものであると言っています。ハイデガールの言葉によれば「思索は人間本質への存在の関連を仕上げる」のだと。そして、そこにおいて真理がたち現れてくるのであれば、それは我々自身にとって、非本来的であることから本来的なことへと、ハイデガールの言いかたをすれば正に、*voll-bringen*、完全さへともたらされること、仕上げることであると言えるのではないのでしょうか。